

《研究ノート》

全学共通英語テキスト *Oxford Word Skills (Basic)* の活用

— Listening & Writing と English Communication における連結活用 —

海老澤 邦 江*

I-はじめに

Oxford Word Skills⁽¹⁾を全学に導入して2年が経過しようとしている。このテキスト導入には、「欧州言語共通参照枠」(CEFR=Common European Framework of Reference for Language)の「基礎段階の言語使用者 A1」である本学生を対象とし、初年次から卒業まで継続的にどの英語教科にも活用できる汎用性の特長を生かす意図があった。テキストは、日常に使用する語彙はもちろんのこと、設定された場面に応じた用例、表現活用のための練習、自学自習用のCD-ROMなど、コミュニケーションを主体とする学習には十分な内容を備えている。特に、本学のカリキュラムに組み込まれている海外研修先はニュージーランドであり、使用言語がイギリス英語系であるため、その事前学習には適切な教材である。さらに、中学・高校ではアメリカ英語を採用しているため、学習者のほとんどにとってイギリス英語とアメリカ英語の差異や文化差などの気づきにも活用できるという利点があった。

ここで私が2年間テキストを使用した中で、1年次と2年次で担当した授業でテキストを活用した基礎的な英語コミュニケーションの内容の一部を紹介しながら、連結授業の可能性と課題を提示

し中間報告としたい。

I-1 Self-introduction in Listening & Writing

1年生対象の授業では、まず〈People〉のUnit 8 'I can give personal information' ならびにUnit 9 'I can fill in a form' を利用する。これは、「自己紹介」を兼ねてのものだが、① 氏名(未婚, 既婚, 性別など含め姓と名の表現方法も, きちんと理解している学生は意外にも少ない。)② 居住地(住所表記についても正確な表記法を確認する必要がある。)その他にUnit 10 'I can talk about my family', Unit 13 'I can describe people', Unit 14 'I can talk about character' などの内容を加味して, ③ 自分の家族, ④ 自分の身体的特徴などの表現を項目ごとに記入できるワークシートを準備し配布した上で, 学生はその書式の事柄に従って記入する。

時間的制約があるので一部の学生に、「自己紹介」という形で発表をしてもらった後に, これらが回答となるような質問を学生に考えてもらう。中学初年次程度の質問なのだが, この作成には予想以上の時間を必要とした。すでにそのレベルに達している学習者には, それほど困難な作業ではないが, 約四分の三位の学生にとっては簡単ではなかった。このあたりで習熟度別でないクラス編成の課題が浮かび上がる。質問作成が終わったと

* 江戸川大学 情報文化学科教授, 語学教育研究所長
英詩, 文化比較

ここで、学習者全員に不特定の学生5名に質問し回答を得るというインタビューゲームを行うように指示する。このインタビューゲームの利点は、英語コミュニケーションそのものより、入学間もない学生たちにとっては、新しいクラスメートとの知り合いになる機会を提供する点であろう。英語コミュニケーションにおいては、「発話」することの大切さを強調しながら、当然なのだが双方向性の「発話」ができるような工夫が常に必要となる。教師1人に対して数十人もの学生を相手にするには限界がある。現在のところ「双方向性」といった場合、ペアワーク、グループワークなど学生同士のコミュニケーションが主体となる。であるから、コミュニケーション自体が、応用ではなく、いわゆる画一化した表現にとどまる、言語活動が十全に行われたかの教師側の確認が十分でないなどの問題がある。しかしながら、少なくとも学習者は相互の言語活動に意欲的であり、達成感を得られている。

I-2 Cultural understanding in Listening & Writing

1年次後期では、学習内容のひとつとして「文化理解」を取り上げる。テキストでは、〈Places〉Unit 34 'I can talk about my country' を活用する。異文化理解というとイギリスやアメリカなど英語を母語とする国の文化を前提とする傾向が日本では未だに強い。学習者の大多数も英米以外の異文化について知識を十分持っているとは言い難い。しかし、ニュージーランド研修に参加した学生などは、英米以外の他の文化圏や英語学習に関心を抱く者が多くいる。

まずテキストではブラジルが例示されている。PCのグーグルアースを使い、ブラジルの位置、国土の大きさなどを学習者たちに理解してもらう。それを出発点として、世界の主要な国の首都を調べ、特に日本語表記と英語表記の違いや発音上の違いなどを気づかせる。そうした基本作業を経た後に、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、中東、アフリカ、オセアニアの各諸地域から国を学生たち

に選択させ、検索エンジンを活用し基本情報の収集を行わせる⁽²⁾ (資料1)。

この作業の目的は、学生が選択した各国がどの地域に所属し、日本と比較してどれくらいの規模であるかを理解してもらうことである。さらに、学生にそれを基に発表する形式を取った。また、Unit 35 'I can talk about my town' では、場所を象徴する建造物などに関する文化的説明が必要となる。特に宗教的建造物については、仏教・キリスト教・イスラム教では異なるので、教員の予備知識は欠かせない。こうした知識を得た後に、学生たちに自分の住む町や日本の観光地を簡単に紹介できるように指導する。その際には、マップを作成した上で〈Getting around〉Unit 31 'I can ask for and give directions' の道案内の内容を利用する指導も考えられよう。

II-1 Self-introduction in English Communication

2年次対象に開講している English Communication の授業の実践例を紹介したい。まず、「自己紹介」として1年次に行った内容に、自己表現の柔軟性を持たせる。この作成には、これまで学習したテキストを参考にしてもらいながら、規定表現だけでなく、自分の個性や考えなどをまとめた英文に表現してもらう。この時活用したのが、情報カードである。学生には1枚の情報カードを配布し、① 氏名 ② 趣味 ③ 友人の性格 ④ 自分の性格 ⑤ お気に入り 以上規定5項目を設け、さらに自己紹介文として自由記述する。またカードをデザインしてみるという課題で、個人カードを作成してもらった⁽³⁾ (資料2)。

このカード作成については多くの学生が意欲的であり、期待以上の個性的なカードを結果として得られた。学習者たちは、一般的な「自己紹介」については消極的であるが、こうした形で工夫する要素を取り入れると、積極的な自己表現につながってゆくことがわかり、私自身のこれまでの認識を新たにしてくれた。一方で、自己表現の種が見つからない、あるいは自己表現の種とは意識で

きずに、何を表現すればよいのか戸惑う学生が少なからずいた。これは言語活動の問題ではない。語学学習において運用能力ばかりに重きが置かれるが、実際には「何を」表現するという内容の問題が根底にあることを指摘したい。

II-2 Cultural understanding in English Communication

2年次の文化理解を取り上げたい。こちらも1年次で学習した内容をあらためてテキストを使用し復習を行う。この時点では、ほとんどの学習者は、残念ながら1年次で学習した大半を忘れていることが多い。しかし、テキストの継続利用のおかげで以前の学習内容を取り戻しやすい。この授業では留学生が多く履修していたので、日本人学生には海外の1国を、留学生には自国を紹介するという課題を与えた。さらに、1年次の内容に加え、言語、元首、宗教、特産物、著名人、名所旧跡など、その国を代表する項目を基本情報とした。これらをパワーポイントにまとめ、英語で口頭発表を行った⁽⁴⁾ (資料3)。

2年次になると、検索の仕方にもなれているので、追加した基本情報などの収集はあまりなかったようである。さらに、個人カードの例でも見たように、学生個人の知識を総動員してスライドショーを作成することにたいへん意欲的な学生が多かった。英語での口頭発表なので、基本表現の提示や英語プレゼンテーションの言い回しなどの指導は必要となるが、常套的な表現を指導することで発表者たちはそれほど戸惑いをみせずに発表を行った。理想的には、学習能力の高い学生には、英語での質疑応答を加えてもよいのではないかと思える。特筆したいことは、この作業によって英米だけでなく異なる文化圏の学習に対する興味・関心が促進されたことである。アジアからの留学生は、自国の紹介を行ったのだが、日本人学生にとっては未知の文化圏に等しい。留学生と日本人学生が交流する日常的風景は、残念ながら本学ではあまり見られないと言ってよいであろう。遠い距離感を縮める上でも、英語を媒介とした知

的交流が促進できる場を提供できるのではないかと考えている。

III-課題と展望

1年次と2年次の1科目に絞って授業実例の一部を紹介した。同じテキストを継続して使用する利点は、一度忘れた学習内容を容易に想起できること、特に1年次から2年次へと段階的に内容の充実が図れることであろう。課題としては、今後さらに継続的学習・段階的な内容充実を図るためには、年次毎に言語活動内容、指導内容、成果物などを具体化する必要があるだろう。学習した内容を蓄積した結果を提示することは容易ではない。というのも、多くの学習者は、その授業が終わることである種の満足感なり達成感を得たとしても、蓄積されているかの判断が困難だからである。

まず学習者の意識を根本から変えてもらうことも必要かもしれない。日本の英語学習が英語コミュニケーション重視にあるとしても、現在においてもやはり「受験重視」という側面はなくならないと思う。ここに興味深い逸話がある。

本物は本物に巡り会う運命にあるもので、この先生がまた偉かった。先生はまず彼の英語を試すべく、ある書類を取り出して読ませた。彼の朗読を黙って聞いていた先生は、「ア、判りました。あなたの程度は判りました。それでこの際あなたに必要なことは新たに英語を学ぶことではありません。あなたの知っている英語を忘れることです。あなたが日本で学んで来た英語というものが、あなたの耳や口にこびりついてあります。これを一掃することが先決条件です。ラーン (learn) するよりも、アンラーン (unlearn) しなさい」と言ったという⁽⁵⁾。

つまりこれまでに学習してきたものをリセットして新しく学ぶという姿勢に立ち戻れということを行っている。中学・高校と学習してきたものを忘れるというのは、なかなか容易ではないが、少なくともそうした意識を持つことで、大学での学習

に意欲的になれるのではないかとも思う。無論、それに対応するために、教える側の意識も変わらなければいけないのであろう。「こんなこともわからないのか」「今まで何を勉強してきたのか」という前提では、いくら学生に初心に戻れと言っても、学習意欲を減退させる結果にしかならない。

また、現代の学生の中には「英語ができなくても日本で生活できる」「一生英語を使わなくてもよい人生を送るから」と堂々と公言する者もいる。いわゆる英語無用論につながる態度である。国学の優先を唱える思潮も実際にあり、常に潜在的な言語政策の問題—母語が脅かされるのではないかという危惧—がある。母語が脅かされた歴史は多くあったのは事実であるし、現在でも母語の消滅に危機に晒されている地域は実際に存在する。しかしながら、こうした国や地域は、歴史的推移の中で見ると、植民地政策などの外圧によって言語政策を組み入れられてしまったということが多い。過去の日本でも、こうした事実があったことを忘れてはならないであろう。現代の日本について言えば、ビジネス界で英語を社用語として推し進める事実があるにしても、英語を公用語とせよという極端な提唱を行う、森有礼のような人物が現れる気配は現在のところないのではないか。

こうした危惧を念頭に置きながらも、〈多言語共生という理想を追求しながら、同時に「普遍語となった英語」を活用する〉際の視点と指針をあらたに検討しなければならないということである⁶⁾。この際に再考すべき点は、英語学習がこれまで通り単なるスキルの問題に還元してよいものかということではないだろうか。中学・高校、大学においても英語を学習してきたのにも関わらず、なぜ実際には使えないのかという批判に対して敢えて答えるならば、「言語」を単なるコミュニケーションツールにとらえ、語学学習を安易に考えてきたからではないかと。言語に対する考えを再検討したうえで、日本の英語教育の環境を考えなければならないであろう。取り敢えず、語学学習に必要な時間は、4,000時間が必要というデータがある。これは能動的な学習にかける正味時間である。授業時間数の問題ではない。語学学習は集中

して行う環境と学習者の姿勢が必要である。例えば、睡眠時間の約8時間を除いて、英語のみで能動的な学習も活動的な生活も行うということ、正味250日を過ごす計算になる。こうした環境下であって、ようやく自然な英語コミュニケーションの基本的スキルが身につくであろう⁷⁾。しかし、国内の教育機関においてそうした環境整備が可能かとなるとなかなかむづかしい。

一般的に言語学習に関して持つ幻想あるいは錯覚は、「発話」を主体とした語学学習、例えばオーラル・コミュニケーション中心に学習を行えば、自然と身につくのではないかという考え方であろう。これは、日本語教育にも共通した錯覚なのではないかと思っている。母語であるから日本語ができて当然という前提のままでは、最近よく耳にする日本人学生の日本語リテラシー力低下の問題は解消できないのではないかと思う。実際に母語である日本語を的確に口頭なり活字に表現するという技術は、目的に応じた言語学習と不断の努力が必要である。

格別日本語文法を勉強せずとも自然に日本語を使っているのだからという理由から、英文法を特に勉強しなくても日常生活で不便を感じない程度の英語コミュニケーションは可能ではないかという、これまで非常に単純な論理のもとに英語コミュニケーション学習が論じられてきたと思われる。しかしながら、言語とは私たちの感性、思想、文化を表出する本質的かつ重要な役割を担っていることを認めていけば、言語学習を単なるスキルの問題に帰する点にそもそも無理があることを理解できよう。おそらく、言語学習の複雑さを回避するため、また学習者に対する心的負担軽減のため、「コミュニケーションの道具」に過ぎないのだからという言説が広まってしまったとも考えられよう。そのあたりを鳥飼玖美子氏は以下のように語っている。

外国語を使うとは、異質な他者を相手に異質な言語で精一杯使って果敢に関係構築を試みるのだから、簡単なわけがない、…そこを誤解しているから、コミュニケーションは単なるスキル

だ、英語は道具だ、などと甘く見てしまうことが多く、だから英語学習が成功したようにおもえないのではないのでしょうか⁽⁸⁾。

言語コミュニケーションの最大の目的は「関係構築」である。その人間関係構築の良し悪しによって、私たちの共同体や私的な関係性が左右されている。英語コミュニケーションという言葉は、そうした関係構築を予想させる学習内容を目指しているはずなのだが、おそらくはその共通認識には至っていないのではないかと思う。

明治から昭和の初めにかけて英学の達人と言われた人々は、学校教育のみで自らの語学力を身につけたわけではない。鳥飼氏が重ねて強調した点は、これからはいかに「自律的」に学習するかということである。そのための動機づけなど様々な材料などを教育機関が提供していかなければならないと思うが、強制されるのではなく、自らの意志によって学習すること、自律的な学びの姿勢や考え方を学習者に持ってもらうなければならない。言語学習に加えて、現代を日本国という地域的な枠組みのみで物事を思考するのではなく、多角的

な視野と異文化理解への思考、多様性への柔軟な受け入れ姿勢を形成してゆくような人間教育を語学の授業に限らず多様な教科で教授する必要があるのではないかと考えている。

《注》

- (1) *Oxford Words Skills* (Oxford University Press, 2008) をテキストとした。本文中に言及されるチャプターならびにユニットは、そのテキストからのものである。
- (2) 別添資料(1)参照。
- (3) 別添資料(2)参照。
- (4) 別添資料(3)参照。
- (5) 斉藤兆史『英語達人列伝』(中公新書, 2000年) 111頁。
- (6) 鳥飼玖美子『国際共通語としての英語』(講談社現代新書, 2011年) 81頁。
- (7) 晴山陽一『英語ベストセラー本の研究』(幻冬舎, 2008年) 202頁。
- (8) 鳥飼, 182頁。

* 別添資料(2)(3)については、それぞれ情報文化学科2年の大鹿剛志君、柴田麻里衣さんから資料提供をもらった。お二人には心より感謝いたします。

資料 (1)

Listening & Writing I (海老澤) 第7回

テキスト 18 ページの国名を読めるようにし、首都を調べなさい。

ヨーロッパ地域から 5 カ国, アジア地域から 3 カ国, アメリカ・中東・アフリカ・オセアニア地域から 2 カ国, 合計 10 カ国を選択し, その首都と人口を調べ表に記入しなさい。

そして, 例に倣って英文を作りなさい。

(例) 国名 首都 人口
 Japan Tokyo 120,000,000
 The capital city of Japan is Tokyo. (日本の首都は東京です。)
 Japan's population is about 120,000,000. (日本の人口は約 1 億 2 千万です。)

ヨーロッパ

国名	首都	人口

以下省略

Let's ask each other about the countries where you want to go.

1. Where do you want to go?

Student 1

Student 2

Student 3

2. Where is the capital?

Student 1

Student 2

Student 3

3. How many people live there?

Student 1

Student 2

Student 3

番号

氏名

自己評価

• 授業姿勢

• 活動 (アクティビティ)

〈注〉 Question 1~3 を最低 3 人のクラスメートに質問し回答を得るというインタビューゲームを行なう。授業の最後に、授業への積極性ならびに言語活動を各自自己評価し、提出する。

資料 (2)

School Number : 1432016
 Name : Tsuyoshi Ooshika
 Hobby : My hobby is to play table Tennis.
 Friends character : He is friendly.
 Yours character : I'm kind and shy
 Favorite things : My favorite singer is the EXILE!

Self introduction
 My name is Tsuyoshi Ooshika. I was born in Saitama prefecture when the year was 1993. My birthday is August 2nd. The famous thing of my town is some flowers called Cosmos and these are vivid and beautiful.
 My character is very kind and shy, so I'm not good at talking to everyone. But I must overcome to do it because it's very hard for me from now on.
 My favorite singer is the EXILE. Especially, I like listening to the song called "道" in Japanese. Finally, I have a dream that get the Grade 2 of Eiken at this University and want to work after the graduation absolutely. So I want to effort memorizing many English words and listening to English. Thank you for reading.

MIAMI
 AFB.BAYSIDE
 STADIUM

LIFE 1852

資料 (3)

2/15/2016

Greece: Country of Myths
1432013 MAEUE SHIBATA

Where is Greece?

Capital is.....?

Athens
 Parthenon

Basic Information

Population→11,161,000
 President→Prokopis Pavlopoulos
 Minister→Alexis Tsipras
 Religion→Christianity
 Language→Greek
 Money→euro(€)

資料 (3)

One day of the Greek

Get up	6:00~7:30
Work	7:30~13:30
Lunch	13:30~15:30
Have a nap	15:30~17:30
Leisure	17:30~21:00
dinner	21:00~22:30
Sleep	22:30~6:00

